

Nanako Nakajima and Gabriele Brandstetter (eds.)

*The Aging Body in Dance: A Cross-Cultural Perspective*

中島那奈子, ガブリエレ・ブランドシュテッター編『老いゆく身体と舞踊：文化横断的視点』

武藤大祐 (群馬県立女子大学)

13本の論考やエッセイで構成された本書は、舞踊とaging(加齢, 老い)という、普遍的であると同時に周縁化されがちなテーマに様々な角度から光を当てたものである。まず各部の表題を列挙しておこう。1. 「二十世紀末の老いる身体：アメリカのポストモダンダンス, ドイツのダンス, 日本の舞踊」, 2. 「オルタナティブな舞踊能力：ディス/アビリティと欧米のパフォーマンス」, 3. 「コンテンポラリーダンスにおける加齢と身体をめぐる政治」, 4. 「混交への眼差し」。

編者の二人によれば、舞踊と加齢というテーマは、欧米では従来「タブー」とされ、近年ようやく語られ始めた。西洋の古典舞踊であるバレエが典型的に示す通り、踊り手にとって老いることは端的に能力の衰えを意味するネガティブな事柄と考えられて来たからである。このタブーが徐々に破られつつあるとすれば、背景にはもちろん高齢化社会という現実があるだろうが、同時に、ピナ・バウシュの『65歳以上の紳士淑女によるコンタクトホフ』(2000年)、グザヴィエ・ル・ロワの『未完結の自己』(1998年)など、「他者」や社会的弱者を積極的に主題化するコンテンポラリーダンスの潮流もある。こうした舞踊におけるデモクラシーの動きをめぐっては1960年代のジャドソン教会派を直接の先行例として参照することができ、本書でもいわゆる「ポストモダンダンス」は重要な参照軸となる。しかし他方、我々に馴染みの深い日本の舞踊文化において加齢はタブーどころか全く異質な意味をもつ。年功序列の価値観、非段階的な舞踊教育の伝統のみならず、年齢を重ねることこそが「芸」を深めるというイメージもある。このような欧米と日本の舞踊文化の顕著な差異に着目した点こそが本論集の特色に他ならない。

上述のような基調は、第一部に収められたラムジー・パートのポストモダンダンス論と、渡辺保の日本芸能論の対比により明快に提示されている。

パートは、イヴォンヌ・レイナー、ステイーヴ・パクストン、シモーヌ・フォルティといったジャドソン教会派のダンサーたちが高齢の現在でも精神的に舞台上に立っている事実をふまえつつ、レイナーのあまり知られていない1967年のエッセイと、モーリス・ブランショの「パートルビー」論を巧みに接続し、ジャドソン教会派の追求した「ニュートラル」かつ「受動的」な人間の身体は、「普通

の身体」というより、むしろそれぞれの「特異性」(singularity)を担う身体なのであり(38)、それゆえ何らか一定のアイデンティティに絡め取られることを拒絶する抵抗体たり得るものだと説く(43)。こうした解釈の上に立ち、ジャドソンの作品においてもしばしば取り上げられた、病んだ身体、老いた身体という、際立って受動的な、いわば弱い主体性こそ、ジャドソンのなデモクラシーの核心に位置するものとパートは捉えてみせる。

他方、渡辺保は世阿弥の「真の花」の概念と、渡辺一流の芸能論(舞台に立つ身体は本名・芸名・役名という三重のアイデンティティを有する)を簡潔に説きながら、日本の芸能において加齢がどのような意味を担っているかを論じる。渡辺によれば、老いることは身体能力の喪失ではあっても、同時に様々な経験の獲得でもあり、これが表現の巧みな様式化や(57)、「離見の見」といった高度な技術(58)を可能にするのである。

このように全く異質な領域に属する論者が同一テーマで議論を展開する刺激的な本書であるが、全体の傾向としては、踊り手の加齢を障害(disability)の一種として捉えた論が目立つ。もちろん障害なるものに社会通念とは異なる価値を見出せるのが舞踊だ、との前提を伴ってである。

論者の一人であるアン・クーパー・オールブライトは、クィア理論家のジュディス・ハルバースタムの「低い理論(low theory)」を参照する。「環境によっては、倒れること、失うこと、忘れること、変質すること、後退すること、脱落すること、知らずにいることが、むしろ創造性、協力関係、驚きに満ちた生をもたらしてくれることがある」とハルバースタムはいう(71)。オールブライトによれば、障害を持つことは、その人にとって世界が予期不能性に満ちた不安定なものに変わることを意味するが、しかし同時に、身体には思わぬ出来事に直面するたびに「どうにかして切り抜ける」力も備わっており、そうして培われる「感応性の高い身体」がパニックや不安の回避を可能にする(70)。障害を持つ身体は日常の中で「絶え間ない調整」を自ら行っている(行わざるを得ない)。オールブライトはこれを、パクストンのいう「小さなダンス(small dance)」と結び付ける。「小さなダンス」とは、一見静止している身体も実は骨格筋の絶え間ない微細な動きによって均衡が保たれ

ているという、その様相を捉えた概念である。

このように身体の動きを微細なレベルへと分解して捉えることで、一般的には能力を喪失したと見なされがちな障害者や老人の身体の潜在的な力を言語化しようとする場合、より具体的にはソマティクスの観点からする記述が有効だろう。本書では外山紀久子がこの領域に踏み込んだ考察を加えている。外山の論考は、合気道、禅、太極拳、ヴィパッサナー瞑想などアジアの身体技法に大いに触発されたジャドソン教会派のダンサーたちの証言を導きの糸としつつ、カスタネダの「ドン・ファンの教え」と日本の芸論の共通点を経由して、世界を対象化して「見る」能動性よりも、没焦点的に「聴く」という受動的な行為／知覚の洗練によって開かれる身体の実相を解きほぐしていく。

とはいえ、世阿弥が老体の物真似について「閑心遠目」（心を閑に保ち、視線は遠くへ）と述べたように（130）、優れて受動的で感应性の高い身体を、そのまま実際に視力の衰えた老人の「弱い」身体に潜在するオルタナティブな能力と同一視してしまうのはやはり非現実的である。外山も次のように問題提起している。「しかしながら、そのような老いた身体をめぐる知見が、どのように、またどの程度、老いていく身体の実相の中に位置付けられるのか、と問わねばなるまい」（131）。

いいかえれば、老いた身体や障害者の身体だけでなく、それらに社会的弱者の地位を押し付ける現実の権力の布置にも目を向ける必要がある。オールブライトは「近年の経済的、政治的破綻が、我々の精神や銀行口座のみならず身体にまで及ぼす影響」（70）を語ろうとする。またベトラ・クッパースは、障害を持つ身体が日常の中で様々な物理的障壁に直面する経験は「生権力（biopower）を体で読むこと」に他ならないと喝破する（111）。

クッパースが論じるのは、コミュニティダンスのプロジェクトにおいて浮かび上がって来た、参加者たちの身体と「記憶」の関係である。彼女はニュージーランドで、癌患者のコミュニティとともに、身体や歌、語り、対話などによる交流の場を作り出したのだが、そこではマオリ族と白人入植者の末裔それぞれの文化の諸要素が錯綜すると同時に、両者の歴史的な関係までもが顕在化したという（111）。コミュニティダンスの実践とそこでの身体的な交感が、地域の歴史を不可避的に掘り起こす。この考察は、「加齢」という現実が個人レベルの記憶と社会的な歴史の双方にまたがるものであることに気付かせてくれる。

ところで、加齢を「障害」の枠組で扱う論は、既に蓄積された議論を土台として様々に展開可能であるとはいえ、加齢という主題はそれに尽きるものではない。「障害」には還元されない新鮮な論点を提出するいくつかの論考にも注目したい。

マーク・フランコは、一定の年齢を超えたモダンダンスの振付家＝ダンサーによる「手」の表現に目を向ける。例としてフランコは70歳に近付いたマーサ・グレアムの舞台を挙げる。カンパニーのダンサーたちに比べ、グレアムの身体は明らかに利かなくなっている。それでもグレアムは、存分に動ける他のダンサーたちが不十分にしか表現できていないことを、わずかな手振りで十分にこなしてしまう。1980年代のマース・カニンガムも同様だったとフランコはいう。なるほど高齢のダンサーが一見簡略な腕や手の動きのみで振りをこなす場面は、モダンダンスに限らず見受けられる。そしてそれが単なる不自由さの印象とはほど遠く、あたかも短い弧を描くだけで円の全体を表わしてしまうような雄弁さを湛えることもある。フランコは、このように凝縮された身振り表現は歳を重ねて熟練したダンサーに固有のことではないかという。「過去に踊った際の記憶」の蓄積がものをいうのである（155）。実証までには至っていないものの、直観的に首肯したくなる指摘ではある。またこうした動きの省略表現を、要素還元主義的モダニズムとは異なる「抽象」のあり方として捉え直す解釈も大変興味深い（158）。

ジャニス・ロスの論考は、アンナ・ハルプリンが亡き夫のローレンス・ハルプリンとの私的な関係を素材にして制作した2011年の作品を取り上げる。この作品はローレンスからアンナへの恋文や、二人の交合を描いた官能的なスケッチなどを素材にしなが、両者の関係の歴史を若いダンサーの夫婦が演じるというものだったという。故人の生前にはまず不可能であったと思われるこの「コラボレーション」は、ロスによれば、いわば「公開された喪」であり、70年間もの長い結婚生活を経た高齢のダンサーにのみ許される「特権」である（146）。老いることを、肉体的な衰えとしてではなく、長い人生の締め括りの経験という観点から考えることもできるわけである。

以上、ハイライトの一部を瞥見したが、読み手の関心に応じて様々なヒントを得られる論集であることは間違いない。ただ、文化的差異や文化横断性に焦点をあてた本書において、舞踊における加齢への価値付けがもっぱら日本の伝統と強く結び付けられている点は気にかかる。踊り手の加齢が必ずしも「障害」とはならない、さらには積極的な価値にすら通じるような舞踊文化は決して日本に固有ではなく、世界各地に見られる。むしろ「若さ」を過剰に価値付ける文化こそが西洋近代の特殊性で、これを基層とした「近代化」がグローバルに影響を及ぼしているというべきではないか。本書の議論が様々に反響し、さらに広い視野に立った研究を喚起していくことが期待される。

（Routledge, 2017年1月刊行）